

分布：全国

ヒツジグサ（スイレン科）

ニユムパエア テトラゴナ

学名：*Nymphaea tetragona*

羊草

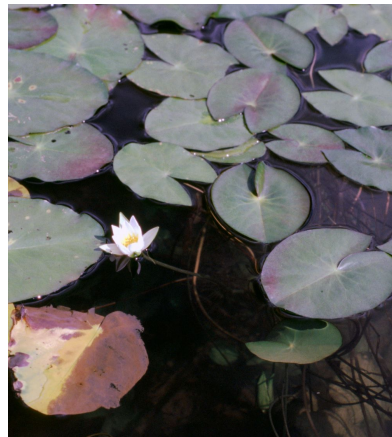
別名：スイレン、カメバス、コレンゲ、カッパグサ、ハクセン(白鮮)

主な生育場所

ため池や湖沼、湿原の池塘など、恒常的な止水域に生育。腐植由来の有機物が多く溶存する腐植栄養湖や貧～中栄養の池や湖沼に見られ、富栄養な環境で見かけることはない。また古い池に多い。

特徴

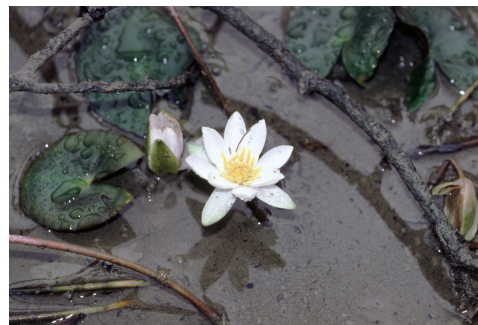
多年生の浮葉植物。太く短い塊状の根茎から沈水葉と浮葉を伸ばす。沈水葉は薄く、幅の広い矢尻形～半円形。浮葉は楕円～卵形で、基部は深く切れ込み、裏面は赤紫色を帯びる。花は径3～7cmで、開花は2～3日続き、午前中に開き夕方閉じることを繰り返す。花弁は白色でガクは4枚。葉や花は北日本に行くほど大きくなる。



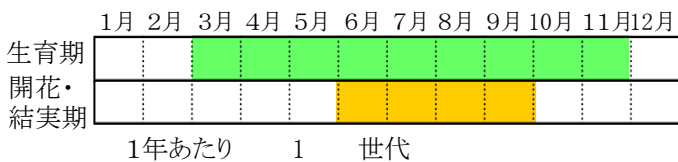
名前の由来：園芸スイレンが早朝から開花するのに対し、羊の刻(午後2時ごろ)から開花するとされたことから。実際には、お昼前から開花はみられるが、暑い日中の盛りに純白の花は目立つ。

<農業との関係>

水田に生えることはないが、ため池にはかつてよく見られ、ため池を水源とする地域では馴染みの水草。熱帯スイレンや温帯スイレンなど外来種由来の園芸スイレンは地下茎を泥中に伸ばし繁茂するため、ため池では取水障害などを引き起こすが、在来のヒツジグサの根茎は横に拡がらず、また全体に小型のため、ため池で障害となることはほとんどない。



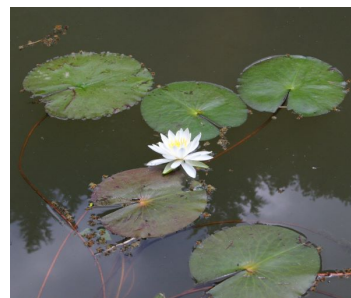
<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 観賞用の園芸スイレンは、葉や花がヒツジグサより大きく鋸歯や模様があるものが多い。また、花色が赤や、ピンク、黄色、青色、紫色など白以外のものはすべて園芸種か外来種。花が白色でも、花弁数が多いことでヒツジグサと見分けられる。

<一言うちく>

日本の在来種であるヒツジグサですが、近年、各地で減少し、全国26都府県で絶滅危惧種に指定されています。外来種の園芸スイレンが各地で増殖しているのに対し、ヒツジグサは園芸スイレンよりも富栄養化などの水質の悪化に弱く、また埋め立てによる生育地の消失が大きな要因です。



花も葉もヒツジグサよりも大柄な園芸スイレン

<人との関わり合い>

清楚な花を咲かすヒツジグサは、農家の庭先の水盆で観賞用に栽培されることも多かったが、今や各地で減少していることもあり外来種の園芸スイレンにとって代わられてしまった。アフリカやインドでは、種子や根茎を食べている報告があるが、日本では食用の記録はない。また、花には止血・鎮痛作用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

賜りし刻や光やひつじ草（岡本まち子） 山の池底なしと聞く未草（稲畑 汀子）
水面にたどりつきたるヒツジグサ 晩夏のひかり集めてひらく（高田流子）
ひつじ草白きひつじのごとき花泥炭くさき水にしづまる（生方 たつゑ）